

念願の初優勝

プレーオフ6ホール之死闘

最後はバーディーで決める

<九州ミッドシニア>

8オーバー 152 68歳 佐藤 憲一(大分)



【写真はプレーオフ6ホール目でバーディーを決め、ガッツポーズをする佐藤】

左手の拳が決着の合図だった。ピン左下8 $\frac{1}{2}$ のバーディーパット。強めに放った佐藤の気持ちを込めたパットは「コーン」という乾いた音とともに長い戦いに終止符を打った。「1 $\frac{1}{2}$ オーバーしてもいい、と思って。初めて(カップに)届いたパット。やっと終わったな、

と」。佐藤が胸を撫で下ろす。気心の知れた同じ大分県勢の坂本とのプレーオフは、それまでに佐藤が勝っていてもおかしくない内容だった。1番ロングで1打強、2番でも2打とチャンスのパットがありながらも決められない。「途中、嫌な気分になった。負けるような気分になって」と弱気になりかけていたのだが、6ホール目での強気の一打が佐藤に「九州」というタイトルのつく初の栄冠をもたらした。これまでプレーオフは大分県の大会やマスターズで経験しており、今回を含めて3戦3勝と負けなし。瀬戸際に強いのだ。

大分県豊後大野市在住の68歳。大分県庁に勤め、59歳の時に早期退職し、今は会社勤めをしながら競技ゴルフを楽しむ。「実は去年(優勝を)狙っていた。でも、同級生(山本宜正)に先を越され、一歩遅れていた。(プレーオフでは)坂本さんは、くまもと中央(2011年の九州シニア優勝)で1度取っているの



で、譲ってくれてもいいんじゃないか、と思っていた」と佐藤は優勝スピーチでみんなを笑わせたが、本音もチラリ。それだけに今回の優勝は喜びもひとしおである。

日本ミッドシニアには九州チャンピオンとして臨む。「コース(愛媛県)は大分から近いし、友達が『四国に練習に行こう』と誘ってくれる。10位以内のシードを取れるように頑張りたい」と意気込む。

【写真は九州ミッドシニアの上位者たち】

3人目の連覇

初日唯一のアンダーパー70

エージシュートも達成

〈九州グランドシニア〉

4オーバー 148 71歳 真鍋 高光(大博多)



【写真は昨年からベースボールグリップに変え、2連覇を達成した真鍋】

史上3人目の2連覇。「きょうは苦しみました。特にドライバーが。風が吹くといけません」。最終日最終組でホールアウトした直後の真鍋のコメントである。この日は5日の南西の風に悩まされた。5番では第1打を左の林に入れてダブルボギーを叩くなどアウトは40。1位で折り返したものの、通算2オーバーとなり、2位とは1打差しか余裕がなくなった。11番でボギー、12番でも3パットでダボを叩き、2位に後退。しかし、13番ショート(120ヤード)をPWで40ヤードにつけてバーディーを奪い、再びトップタイに。続く14番で並んでいた上木がトラブルに見舞われ、単独トップになり、真鍋はそこからの5ホールをパーでしのいで逃げ切った。

最終日は78とスコアを崩したが、初日の4バーディー、2ボギーの70は見事だった。

参加選手中、唯一のアンダーパーとともにエージシュートも達成した。難しいと評判のアウトで3バーディー、ノーボギーの33は圧巻。結果的には、この最初のハーフ33の貯金が連覇をもたらした、とも言える。真鍋本人も「上出来。75で上等」と大喜びしたほど。4回の練習ラウンドのベストが77。それを試合では7打も縮めたのだった。

ゴルフは25歳から始める。専売公社(JT)に勤めながら軟式野球にいそしんでいたが、バットをクラブに持ち替えた。軟式野球の頃は福岡県代表として天皇杯に出場。外野手で5番を任された。左手親指を故障し、痛みを和らげるため昨年1月からグリップをオーバーラッピングからベースボールに変えたが、「野球をやっていたし、違和感なくすぐできた」と今では自分のものになっている。



今年、日本グランドシニアが開催される愛知県の三好CCには苦い思い出がある。「以前、シニアの代表で出た時、あそこの『魔の16番』と言われるショートで『8』を叩いたことがあります。今度はうまくやりたいし、ぜひ優勝を目指したい」と九州チャンピオンは元気に抱負を語った。昨年日本

グランドシニアは風邪を引いて、23位タイと思うようなプレーができなかった。真鍋にとって今度の全国大会は「2つの借りを返す」場となる。

【写真は九州グランドシニアでの上位者たち】